

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

今を生きるストリート・エスノグラフィーの実践：  
ストリートが紡ぎ出す力：  
ハビトゥスとブリコラージュ：  
生きる抗争場としてのストリート：  
文化・信仰という開かれた資源：  
「ストリート」を経験する：  
ヒンドゥー女神バフチャラー信仰とヒジユラ

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2010-03-23<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 國弘, 暁子<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.15021/00001237">https://doi.org/10.15021/00001237</a>                       |

# ストリートが紡ぎ出す力 ——ハビトゥスとブリコラージュ

## 生きる抗争場としてのストリート ——文化・信仰という開かれた資源

### 「ストリート」を経験する ヒンドゥー女神パフチャラー信仰とヒジュラ

國弘 暁子

お茶の水女子大学大学院

本稿は、「この世」と「あの世」を象徴的につなぐ女神寺院の功を「ストリート」と称し、その「ストリート」におけるヒジュラと参詣者との係わりのあり方について論じる。ヒジュラとは、男性としての世俗的な生き方を放棄して、女神に帰依する「無縁」人となり、世俗の人々に女神の恩寵を授ける役割を担う。ヒジュラとしての生き方は、世俗的規範から逸脱するため、人々からは理解し難い存在と見なされているが、しかし、女神寺院という「ストリート」では、ヒジュラは女神により近い存在として参詣者から歓待される。この時、ヒジュラと参詣者との間には、「関係的同一性」にもとづく、具体的な「もう一つのストリート」が創発する。

- |  |   |
|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"><li>1 はじめに</li><li>2 固有な場所としてのパフチャラー女神寺院とヒジュラ<ol style="list-style-type: none"><li>2.1. パフチャラー女神寺院成立の歴史とガーエクワード王国</li><li>2.2. 女神の世話係カマーリヤとヒジュラ</li></ol></li><li>3 「ストリート」としてのパフチャラー女神寺院とヒジュラ</li></ol> | <ol style="list-style-type: none"><li>3.1. パフチャラー女神信仰の起源神話とヒジュラ</li><li>3.2. パフチャラー女神寺院を参詣する目的</li><li>3.3. パフチャラー女神に対する剃髪儀礼</li><li>3.4. 見知らぬ他者との間に創発する「もう一つのストリート」</li></ol> <ol style="list-style-type: none"><li>4 おわりに</li></ol> |
|--|---|

キーワード：この世／あの世、有縁／無縁、正統性、関係的同一性

## 1 はじめに

人間であることの十分なしるしは、道、橋、扉の経験の中にある。道は、鹿が残す獣道をはるかに越える意味をもつ。それは人間の手で築かれた道路であって、こことあそこの、いとやがてとの隔たりを埋める。道路が川の上を通るとき、それは橋と呼ばれ、道路をつくる人は *ponti-fex* [橋をつくる人] 聖なる神官 *pontiff* になる。扉は、橋よりもはるかに深く、人間であることの条件につながっている。扉によって開口される壁そのものが、人間の手でつくられたものであるから。道路や橋と違い、扉は2種類の空間、外部と内部を分ける (イリイチ 2001: 105-106 [強調は國弘による])。

「この世 (現世)」と「あの世 (神の世)」の境界に位置するヒンドゥー女神バフチャラーの寺院は、「この世」の人々が「あの世」の女神に近づくための橋渡しをする。女神寺院はシャクティ (*shakti*: 女神, および女神の聖なる力)・ピタ (*pita*: 土地) とも呼ばれ、「この世」の人々が、女神のシャクティ (聖なる力) を恩寵として授かり、未知なる人生の安泰を祈る場所として存在する。女神のシャクティ (聖なる力) は、「この世」の力で対処しきれない人生の危機や節目を乗り越えるために欠かせないものと信じられている。女神のおかげで危機的状況を克服することができた暁には、人々は「女神の恩寵が得られた」と表現する。本稿では、人々を象徴的に女神のもとへと繋ぎ合わせ、女神の恩寵を得ることを可能にする女神寺院の土地の功を「ストリート」と称す。

バフチャラー女神寺院を参詣する人々は、「ストリート」を経験すると同時に、サリーを纏うヒジュラとも遭遇する。ヒジュラとは、男性としての生き方を放棄した後に、女神を象徴するサリーを身に纏い、バフチャラー女神に帰依する者として生きる人々である (國弘 2008)。通常ならば、男性として「この世」に生を受けた者は、女性との結婚を通じて、『己』とその拡大された『同族』の「パーベチュエーション」(川田 2001: 12)、つまり、己の親族をパーベチュエイト=永続化させることに資す義務を負う。それに対して、ヒジュラになるということは、男児に課せられた義務を放棄し、己の親族との縁を切り、『無縁』の輩 (網野 1996) に加わることを意味する。そして、同じく女神に帰依する「無縁」の人々と共に、互いの死を経験し合う関係を築き合うのである。「無縁」人の集りであるヒジュラの輩は、世俗的な生き方から逸脱し、『有縁』の世界 (網野 1996) に生きる人々から理解し難い存在として敬遠される。しかし、「あの世」と「この世」の隔たりを埋める「ストリート」では、ヒジュラは歓待すべき対象として人々から位置づけられ、女神の恩寵を授ける役割を期待されるのである。

本稿で取り上げるバフチャラー女神寺院は、インド北西部グジャラート州のマヘサナ県ベチャラジ郡に位置する。女神寺院のあるベチャラジ市を中心とするベチャラジ郡は、人口密度の高さを理由に1997年に成立する。ベチャラジ郡のマーマラトダール (*māmalatdār*: 収税官) によれば、2007年8月現在、ベチャラジ郡52村落には92,096

人（男性 47,189 人／女性 44,907 人）が居住しており、ヒジュラはその人数の中に男性として含まれる。女神寺院の周辺に広がる居住地や周辺村落において、ヒジュラはそれぞれ、師弟で生活をする家を築いており、毎朝、その家から女神寺院に通う。午前 8 時頃には、寺院境内の神殿後部脇のあたりで、いつものメンバー（10 人前後）が顔を合わせる。その時の第一声は、「パゲ（*page*：足）・ラガウ」というヒジュラ特有の挨拶の言葉である。グジャラート語の「パゲ・ラガウ」という表現は、目上の人物（神々も含む）の足に触れて恩寵を授かる動作を示す表現である。相手の足に触れる動作には、目上の人物に対する敬意が含まれるため、目下の者の足に目上に立つ人物が触れることは決してない。一方、ヒジュラが交わす「パゲ・ラガウ」の挨拶は、相手の足に触れる動作を伴わず、お互いに手を差し出して、その手で相手と軽く触れ合う動作をとる。そして、その動作は、若い者から年配者に対してという一方向に限定されることはない。

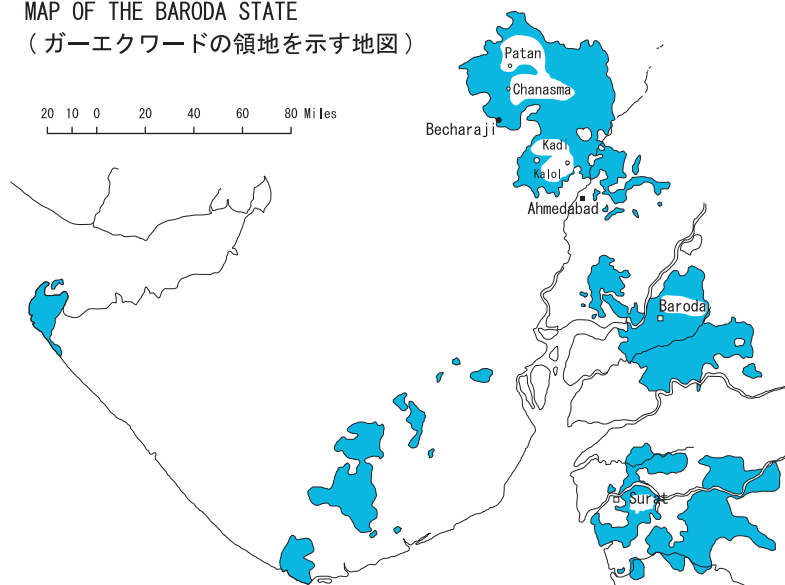
調査期間中<sup>1)</sup>、筆者は女神寺院周辺のヒジュラ宅に滞在していた。筆者が滞在していた家では、朝の起床後すぐに歯を磨き、顔を洗い、それから弟子たちが師に向かって「グル（師）、パゲ・ラガウ」と挨拶する。その時は、弟子は師の足に触れる動作をとり、そして、師の方は、弟子に向かって「パゲ・ラガウ」という言葉のみをかける。それから皆でチャイを飲み、身支度を済ませ、若い者たちから順に女神寺院へと向う。筆者は家の主人と共に、家の戸締りをしてからバフチャラー女神寺院に通っていた。そして女神寺院に着くと、筆者だけは「ジャイ（*jay*：万歳）・マータジー（*mātājī*：女神）」という一般の人々が用いる挨拶表現によってヒジュラ全員に声をかけ、共にその場に座ることを認めてもらう。女神寺院の境内において、筆者は主に、ヒジュラのもとに歩み寄る参詣者とヒジュラとの係わり方についての参与観察を行った。また、グジャラート州政府関係者、女神寺院関係者、そして地元大学教授の協力により、バフチャラー女神寺院に関する歴史的記述を入手した。それら歴史的記録と参与観察データの重ね合わせによって、ヒジュラがその場所に存在することの正統性が、バフチャラー女神寺院の固有な場所性によって与えられていることが明らかとなる。

本稿では、公的記録や現地の人々の記憶をもとに、バフチャラー女神寺院の歴史をつくりあげてきた人々とヒジュラとの位置関係を描き、バフチャラー女神寺院にヒジュラが存在することの意義と正統性の在り処を示す。さらに、バフチャラー女神寺院における参与観察データをもとに、「あの世」と「この世」の象徴的につなぐ「ストリート」を経験する参詣者が、ヒジュラとの間に創発させる具体的な「もう一つのストリート」について論じる。

## 2 固有な場所としてのバフチャラー女神寺院とヒジュラ

ヒンドゥー女神バフチャラーの寺院は、グジャラート州内に存在するシャクティ・ピ

MAP OF THE BARODA STATE  
 (ガーエクワードの領地を示す地図)



Report on the Administration of the Baroda State For the Official Year Ending 31<sup>st</sup> July 1900,  
 Baroda: Government Press 1901 をもとに筆者が作成

タ(女神の地)のひとつである。今日、バフチャラー女神寺院は有名な巡礼地として栄えるが、かつては、人気のないジャングルの中に小さな祠のみが存在していたと言われる。本章では、バフチャラー女神信仰の拠点として寺院が成立した過程と、その女神寺院の歴史に関与してきた地元の人々の存在とヒジュラとの位置関係を示す(写真1参照)。

## 2.1. バフチャラー女神寺院成立の歴史とガーエクワード(Gāekwād)王国

バフチャラー女神信仰の拠点は、かつて村(ガム: gam)の数が44(グジャラート語: チュンワリス *chunvalis*)あった、チュンワーラ(*chunvāla*)地域に存在する。そのチュンワーラの地において、14世紀に、チャーラナ・カースト(吟遊詩人)に属すバフチャラーという名の女性が盗賊に襲われ、自ら命を絶ったと言い伝えられる。その地にバフチャラーを祀る祠を建てたことが、バフチャラー女神信仰の始まりである。

18世紀に入り、バフチャラー女神を祀る祠の横には、グジャラート南部バローダ Baroda 地方に本拠地をもつガーエクワード(Gāekwād)王国によって立派な石造りの神殿が建立される。女神寺院の創設者であり、当時のガーエクワード王国の主権者マナジラウ(Manajirao)・ガーエクワードは、皮膚病のひとつである癩ようを煩っていたが、バフチャラーの地を訪れた時に、女神の恩寵によって皮膚病が治り、女神のために立派な神殿を建てたと伝えられる<sup>2)</sup>。

バフチャラー女神の神殿は西暦1779年に建てられ、それから12年後の西暦1791年

(ヒンドゥー暦サンワット *samvat*<sup>3)</sup> 1847 年), シュラワン (*shravan*) 月シュッド (*shudh*) 9 日目に女神像が納められる。神殿の正面入り口前には、供儀の火を燃やす窪みが設けられ、さらにその先には、十字路 (チャチャル: *chachr*) と呼ばれるピラミッド型の石柱が建つ。この十字路と呼ばれる石柱は、女神に対する動物供儀を執行する祭壇として使われていた (Forbes 1857: 90; Mehta 1947: 20)。英領インド・ボンベイ州地誌事典の記述は、以下のようにバッファローの供儀の過程を伝えている。

バッファローはカマーリヤ (*Kamāliya*) により寺院正面の石のあたりに連れてこられる。赤い粉と花がバッファローにかけられ、儀礼が行われる。白い布が背中にかけてられ、女神像に供えられていた花輪がバッファローの首にかけられる。女神像のもとにあったランプが石の傍に運ばれると、そこでバッファローを繋ぐ紐は解かれる。バッファローがランプの匂いをかげば、それは女神に受け入れられることを意味している。寺院周辺の村に住むコリー *Koli* の人間が、バッファローの首に刃物を振り下ろす。血が振り掛けられた花が女神に捧げられ、傍観する人々はその血を自らの額につける。その血は明らかに力と繁栄の源である。ブラーマンでさえも、自然な、そして超自然な病を呪縛するために、その血が振り掛けられた布を保持するらしい。もしもバッファローがランプの匂いをかがない場合は、その片方の耳を切って血を流した後にバッファローを解き放す。そして女神に捧げる花の上にその血がかけられる (Gazetteer of the Bombay Presidency, vol. 7 1883: 614)。

1859 年に、ブラーマン・カースト<sup>4)</sup> のナラヤンラウ・マダヴァ (*Narayanrav Madhava*) が女神寺院のマネージャー職に就任する。それ以来、バフチャラー女神に対する動物供儀は廃止されたと記録が残る (Gazetteer of the Bombay Presidency 1883: 612)。しかし、女神寺院の周辺地域に住む年配の人々は、子供の頃に、ヒンドゥー歴のアソ (*Aso*) 月<sup>5)</sup> の後半 14 日目 (カーリ・チョウダス: *Kāli Choudas*) の真夜中に、十字路の前でバッファローの供儀が行われていたのを見に行くと語っている<sup>6)</sup> (写真 2 参照)。

動物供儀の執行に直接携わり、女神寺院の実質的な管理を行っていたのは、カルリ村の領主ガラーシヤ (*Garāshiya*: ラージプット・カースト) と、シャンカルプール村に多く居住するカマーリヤ (*Kamāliya*) であった。彼らは、女神寺院の賽銭箱に集まる金銭を、寺院の管理費、乞食や托鉢修行僧に対する食費等に振り分けた後に、余剰分を両者の間で分配していた。しかし、その分配を巡る諍いが絶えなかったため、西暦 1877 年に、ガラーシヤが 10 アナ<sup>7)</sup> の割合、カマーリヤが 6 アナの割合を受け取る権利をもつことが定められた<sup>8)</sup>。西暦 1910 年、ガラーシヤは、グジャラートの旧都パタン (*Pātan*: バフチャラー女神寺院の北部) のバロット (*Barot*) ・カーストに対して負債を抱えていたことを理由に、10 アナの権利をバロットに移譲する (*Shri Bālā Tripurā Sūndari Bahucharāmbā* 1980: 142)。そのため、1943 年にガエクワル政権が発行した『バフチャラー女神の賽銭管理における規定』<sup>9)</sup> には、バロットが 10 アナ、カマーリヤが 6 アナの権利を持つと記される (写真 3 参照)。

インド独立後も、バロットとカマーリヤ・カーストが女神寺院の運営における独占権（イジャラ：*ijara*）を握っていた。それらの権利は、1972、1973年のインディラ・ガンディー政権時代（在位1966～1977年、1980～1984年）に、デリー高等裁判所の判決により没収され<sup>10</sup>、同じくインディラ・ガンディー政権時代にバフチャラー女神寺院におけるバッファローの供犠が完全に廃止されたと、カマーリヤ・カーストの男性たちは語る<sup>11</sup>。

現在では、グジャラート州政府機関の「バフチャラー女神寺院公益信託」が、バフチャラー女神寺院の実質的な管理を行っているが、女神寺院の年中行事にガーエクワード王国時代の名残を見ることが出来る。例えば、かつてバッファローの供犠が行われていたヒンドゥー歴アソ月後半14日目（カーリ・チョウダス）には、シロ（*siro*：小麦粉と水と砂糖を煮詰めた食べ物）を供物として女神に捧げるプージャ（*pūja*：礼拝）が行われる。バッファローの代わりとして捧げられるシロは、カマーリヤ、タコール（農耕に従事するカースト）、マリ（花などの植物を扱うカースト）、そしてサドゥ（*sādhu*：聖人、苦行者）の間で4等分される。地元で育ち、現在も女神寺院で働くブラーマン男性は、この分配方法は動物供犠が実際に行われていた頃からの決りであると語る。そして、その男性は、女神に捧げるシロは、バッファローの供犠の代わりであるため、自分はそれをプラサーディ（*prasadi*：神々に供物として捧げた食べ物を恩寵として分け与えられるもの）として受け取らないと筆者に対して語った。

## 2.2. 女神の世話係カマーリヤとヒジュラ

ガエクワル王国時代の女神寺院を管理していたカマーリヤ・カーストは、プジャーラー（*Pujārā*）という名称によっても地元の人々の間では知られている。誰もが現金収入をもたなかったその昔、人々は穀物や落花生油を女神寺院に納めており、それらは女神寺院の灯り（ディウオ：*divo*）を点すためのディヴェリヤ（*diveliya*：複数形）と呼ばれていた<sup>12</sup>。そして、女神寺院に集まるディヴェリヤを管理していたのがカマーリヤであったと、カマーリヤ男性のラルバイは語る。カマーリヤは非常に小規模なカースト集団であり、2008年時点では、自分たちのサマージ（*samāj*：カースト内婚集団を指す）の数は350人であるとラルバイは述べていた。

バフチャラー女神に関する様々な神話を記すグジャラート語文献「バフチャラー女神の起源（*Shri Bahucharāji Utpatti*）」（1933年、著者 Kavi Shokhina Unjāvālā）では、カマーリヤ・カーストの起源を以下のように記す。

悪魔との戦いに向かう女神は、戦車の馬を引くための人物をカマラ（*kamala*：蓮の花）から誕生させた。戦場を後にする際、馬を引く人物は女神に対して次のように尋ねた。「バフチャラー女神よ、私は誰ですか？」それに対して女神は答えた。「ベタ（*beta*：子供一般に対する愛称）、おまえはカマラ（蓮の花）から生まれたから名前はカマーリヨ（*Kamāliyo*：単数形）

だ。おまえは私のプージャ（礼拝）を行い、つねに私のナイウェッド（*naived*：お供え物）を食べて生きて行きなさい」。そしてカマリヨは尋ねた。「自分が女神により誕生したという証は何ですか。その証があれば、自分が女神の世話係であると世の中の人々は認めるでしょう」。すると女神はトゥリシュール（*trishul*：三つ又鉞、シヴァ男神のシンボルでもある）を手にして答えた。「片側のヒゲを剃り、片方の目にカージャル（*kājal*：目のまわりにラインを入れるための黒色のペースト）を引き、長いコートを羽織り、ドティヤ（*dhotiya*：男性が着用する腰巻き）の代わりにガーガロ（*gāgaro*：女性がサリーの下に着用するアンダースカート）をはき、それを世話役としての証としなさい。世の中の人々は、私の名の下にそれを信じるでしょう（Unjāvālā 1933: 28）。

この起源神話が伝えるように、かつてカマーリヤの男性は、半身女性の、半身男性の様相を呈し、それを女神の世話係としての徴としていた。今日のカマーリヤたちは、かつてのような徴を身にまとうことはないが、バフチャラー女神の世話係であると自ら名乗る。そのカマーリヤたちの主張に対して、地元の人々は、カマーリヤのことを、もとはイスラム教徒であったと言う。アラウディン・キルジ（Allaudin Khilji）の時代に、イスラム勢力を阻止したバフチャラー女神の奇跡を目の当りにして、彼らはヒンドゥー教徒に改宗したのがカマーリヤだと言うのである。この地元の人々の言い分と同様な記事文を、英国の植民地支配期に書かれた文献の中に見ることができる。英国の役人としてグジャラートを訪れたアレクサンダー・フォーブス（Alexander Kinloch Forbes）は、グジャラートの伝承「ラース・マラー（*RĀS MĀLĀ*）」を書き残し、第八章「ボウチェラージ・チューンワール（*BOUCHERĀJEE-CHOONWĀL*）」で、カマーリヤに関して次のように記す。

寺院の収益を保持するのはクマーリーア（*Kumāleās*）と呼ばれる人々である。老若男女あわせて100人といわれており、女神が自分たちを創造したと彼らは主張する。彼らはバフチャラー女神を崇拝し、女神の三又鉞を所持するが、それにもかかわらず、彼らはイスラム教徒であると公言する。それに関して、彼らは、アラウディンによって強制的に改宗させられという口実を述べる（Forbes 1857: 93）。

しかし、今日、カマーリヤ・カーストに属する人たちは、女神が創造した世話係であることを強調し、イスラム教徒説を否定する。

カマーリヤ・カーストは、バフチャラー女神寺院の独占権に加えて、各村々からその年の収穫物の一部を受け取るハック（*huk*：権利）を所有していた。グジャラート語文献「バフチャラー女神の起源」では、カマーリヤが女神の世話役として収穫物や金銭を受け取る権利のことをギラーシュ（*girāsh*）と記している（Unjāvālā 1933: 30）。辞書の定義によれば、ギラーシュとは、ガラー（*garās*）の同義語であり、生計のために与えられる土地を指す。英領インド・ボンベイ州地誌事典によれば、「人々が崇拝する宗教的な場所や人物に対して、古代ヒンドゥー王が譲渡することをガラー（*garās*）と呼んだ。お



そらく、このことから、宗教的譲渡を意味する語としてもっばら使用されるようになった」(Gazetteer of the Bombay Presidency, vol. 7 1883: 341) (強調は國弘による)<sup>13)</sup>。カマーリヤの権利が認められた領土の範囲は、チュンワラ地域を含む北グジャラート、その南に位置するアーマダバード、そして、グジャラート州の半島部にまで及んでいたと、カマーリヤのラルバイは筆者に対して述べた。

かつてのカマーリヤたちは、己の権利が認められる村々を訪れて、その年の収穫物を徴収して回っていたが、その活動に同行していたのがヒジュラであった。ヒジュラはカマーリヤの身の回りの世話をを行い、集めた穀物を背に担いで運ぶ仕事を担っていた。地元の人々は、その両者の関係について、「ファタダ (*fatada*: ヒジュラの民俗語) の稼ぎをカマーリヤが消費する」と表現する。筆者がこの表現を既に耳にしていることを確認して、カマーリヤのラルバイは、ヒジュラは肉体労働を担っていたが、そもそも稼ぎを得る権利は自分たちにあるのだと、一般に言われていることに異を唱えた<sup>14)</sup>。現在では、各村々から収穫物を要求する権利をヒジュラが所持しているが、それは、カマーリヤが権利を放棄したためだと、ラルバイは語る。

カマーリヤと近い関係にあったヒジュラは、フォーブスの『ラース・マーラー』第八章では、カマーリヤよりも地位の低いクラスとして、パーウィーアー (*Pāweeās*) という表記により登場する。ヒジュラはバフチャラー女神の世話に従事し、その数は400人ほどだが、そのうち半分はT村に在住し、あとの残りの半分は乞食をしながらグジャラート地域を流浪していると記される (Forbes 1857: 93)。フォーブスが言及するT村は、バフチャラー女神寺院から西南方向に約70キロメートル下った所に位置する。今日バフチャラー女神寺院に集うヒジュラたちは、T村を自分たちの「村 (= 故郷)」と語る<sup>15)</sup>。今から約700年前に、T村において125人のヒジュラが一斉に自害したという先代たちの死にまつわる逸話を、今日に生きるヒジュラたちは受け継いでいる。現在ではT村に居住するヒジュラは一人もいないが、そこにはバフチャラーを含む7女神を祀る寺院がヒジュラの資金によって建てられた。その女神たちへの供物を捧げる儀礼のために、各地域の代表者たちは、年に一度T村を訪れている。その儀礼が行われた翌日 (2005年2月14日) に、糖尿病を患う1人のヒジュラによる願掛け祈願のための参詣に筆者も同行して、計7名でT村を訪れた。その際に、ヒジュラたちの間で伝承される、先代の死にまつわる逸話の存在を知った。しかし、先代の死の訳については誰も筆者の前では言及しなかったため、後日改めて、先代の死の訳を数名のヒジュラに尋ねてみた。しかし、ヒジュラの誰もが明言を避けていた。

そこで、ヒジュラの歴史についても詳しいカマーリヤ男性のラルバイに、その訳について尋ねてみた。しかし、ラルバイは、「死ななければならなかったのには理由があったからだ」と繰り返すだけで、すぐには語ってくれなかった。おそらくその理由は、筆者との対話を間近で聞いていたラルバイの娘と妻の存在を気にしていたためと思われる

る。しばらくすると、我々の対話を横で聞く人もいなくなり、ラルバイはヒジュラの死の訳について、「女神のカーパダ (*kāpada* : 衣装) を汚さないため」と述べた。『「女神の衣装を汚す」とはどういうことか』<sup>6)</sup>、と筆者がその表現の意味を追究すると、ラルバイは以下のように語ってくれた。

「パーワイヤ (*pāvaiya* : ヒジュラの民俗語) たちは、パキスタン、カッチのラン (*Rann* : パキスタン国境に面するグジャラート最北地域) から、T村にやってきた。当時のT村は2つの王権領土の境目に位置していた。その2つの領土の兵士たちが、パーワイヤを利用して性的欲求を満たそうとしていた。パーワイヤたちは、女神のカーパダ (衣装) を汚さないために、自ら命を絶たざるを得なかった。自害せずに、T村を逃げ出した5人のパーワイヤは、グジャラート各地でそれぞれの拠点を作った。その拠点の1つがバフチャラジであった」(2007年8月17日)。

つまり、「女神の衣装を汚す」という表現は、女神の衣装を身にまとうヒジュラが、性欲の対象として不当な扱いを受けることを意味しており、それを回避するためにヒジュラたちは一斉に自害したと、ラルバイは教えてくれたのである。今日のバフチャラー女神寺院はヒジュラの集う拠点としても知られるが、それは、カマーリヤが、T村から逃げてきたヒジュラをバフチャラー女神寺院に呼んだためだと、ラルバイは主張した。

今日のカマーリヤ男性たちは、女神の世話係としての衣装を身に纏うことなく、女神寺院の運営に携わる権利も剥奪され、その上、寺院境内で参詣者から金銭を受け取る行為も禁止されている。そのため、女神寺院付近で見かけるカマーリヤの男性たちは、参道で商売をする者たちに限られる。そのカマーリヤ男性とは対照的に、女神の衣装であるサリーを纏うヒジュラたちは、女神寺院の境内における己の居場所を今日においても確保しており、参詣者から金銭を受け取ることで日々の生計を立てている。言い換えると、バフチャラー女神寺院の歴史の中で記されるヒジュラは、カマーリヤに付随するかたちで言及されてきたが、カマーリヤがその歴史から消え去った後では、女神寺院の周縁において、今も活動し続けているのである。女神寺院に存在することのヒジュラの正統性は、次章において示すように、世俗的権力により与えられているのではなく、ヒジュラとバフチャラー女神との近接性にある。さらに、女神寺院を訪れる多数の参詣者との間に創発させる、具体的な「もう一つのストリート」によっても支えられているのである。

### 3 「ストリート」としてのバフチャラー女神寺院とヒジュラ

バフチャラー女神寺院に赴く人々は、人生における危機や節目をうまく乗り越えたい

と願い、「あの世」と「この世」の「ストリート」を経験する。女神に仕えるブラーマン司祭を介して、「あの世」のバフチャラー女神に働きかけて、女神の恩寵を授かりたいと願うのである。さらに、神殿の外で参詣者を待ち構えるヒジュラのもとに歩み寄り、ヒジュラからも女神の恩寵を授かるうとする。そのとき参詣者は、ヒジュラの前でひざまずき、ヒジュラの足に触れる。そして、自ら頭を垂れて、ヒジュラの手によって自分の頭に触れてもらう。このような身体の接触を通じて、参詣者たちは、ヒジュラから女神の恩寵を受け取ることができ、そして、ヒジュラに対していくらかの金銭やサリーなどを手渡すのである。本章では、ヒジュラがバフチャラー女神に帰依する所以を示す神話をとりあげ、ヒジュラとバフチャラー女神との関係を示す。その上で、「ストリート」を経験する参詣者にとってのヒジュラの実存意義と、参詣者とヒジュラとの間に創発する、具体的な「もう一つのストリート」について論じる。

### 3.1. バフチャラー女神信仰の起源神話とヒジュラ

チャーラナ・カーストに属すサマルタダナ・ガダウィ (Samarthadana Gadhavi) は、『チャーラナの女神バフチャラー』(1935) という自書のなかで、バフチャラーがチャーラナ・カーストの女神であることを繰り返し主張し、バフチャラーの家系図を交えながら女神として崇拝されるに至った経緯を詳細に記す。ガダウィによれば、バフチャラーが女神として信仰される所以とヒジュラとの関係は以下の通りである。

バフチャラーとは3姉妹の末の娘で、母の実家のあるラジャスターン地方(グジャラート州の北に位置する)で暮らしていた。母の死を機に、父は自分の村ババラクン(現グジャラート州バウナガル県内の村)で子供たちと共に暮らすことにした。父が送った迎えの馬車に乗り、3人の姉と5人の兄弟は南に下ったが、途中でチュンワラの地にさしかかり、そこで一夜を過ごすことになった。当時のチュンワラは略奪の地として知られていた。通常であれば、盗賊はチャーラナ・カーストの馬車は襲わないことになっていたが、メポバライヨという名の盗賊は、チャーラナの馬車とは知らずにバフチャラーが眠る馬車を攻撃してしまった。バフチャラーは怒りをあらわにして、盗賊の罪を知らしめるために、自らの胸に刃物をむけて命を絶った。バフチャラーに続き、2人の姉たちも己に刃物を突き刺し、「卑劣な者よ。おまえはヒジャダのようなことをした。よってパーワイヨ(=ヒジュラ)になれ」と呪いの言葉を吐いた。盗賊はバフチャラー女神の足下にひれ伏して許しを請うと、女神は姿を現して次のように語った。

「我々の呪いは取り消すことができない。しかし、ここに私の寺を建てれば、お前は死後には私のもとへ来ることができるであろう。その上、お前のような者(生まれながらにして男らしさのない者)は誰でも私の寺を訪れ、女性の様相をして、私を賞賛する歌を歌えば、その者も必ずや私のもとへ来ることができるであろう。さあ行きなさい。これが私からの約束である」(Gadhavi 1935: 24)。

このように、バフチャラーとはこの世に実在した女性であり、その死後に、特定の土地と結びついた女神として信仰されるようになった。そして、その伝承の中にヒジュラという存在が登場し、バフチャラー女神を帰依する理由が示される。ヒジュラとしての生を受入れざるを得ないのは、バフチャラー女神が吐いた呪いの言葉が引き起こした禍であり、来世において、その禍から解放されるために、ヒジュラはバフチャラー女神に帰依するのである。

呪いによる禍とヒジュラとしての生き方を結びつけるモチーフは、バフチャラー女神寺院公益信託発行の書籍 ‘Shri Bālā Tripurā Sūndari Bahucharāmbā’ (1980) にも登場する。それは、叙事詩マハーバーラタの登場人物の1人シカンディ (Shikhandi) にまつわる説話であり、バフチャラー女神寺院がヒジュラの本拠地となる所以を説明するものとして利用されている。

シカンディは男らしさのないウィヤンダラ (vyandala: ヒジュラを指す民俗語のひとつ) であったために、戦に向かうことができず、バフチャラー女神の地に赴いた。そこでヤクシャ (yaksya: 神の財宝管理人) と出会い、シカンディは自分がウィヤンダラ (=ヒジュラ) であると伝えた。ヤクシャ (神の財宝管理人) はシカンディを哀れに思い、生命をもつ水で沐浴をさせて、彼に男らしさを与えた。それを後から知ったヤクシャ (神の財宝管理人) の師は、自分の許可なく、命の水を使用したことに怒りを覚え、ヤクシャ (神の財宝管理人) をウィヤンダラ (=ヒジュラ) にしてしまった。自分の師に対してヤクシャ (神の財宝管理人) は許しを乞うと、師は次のように答えた。

「私が一度口に出した言葉を取り消すことはできない。しかし、お前は、この地をウィヤンダラ (=ヒジュラ) としてのベカ (bhakha: 苦行者) の本拠地とし、バフチャラー女神の地におけるベカ (現世放棄者) として信仰されるだろう」(1980: 38)。

バフチャラー女神寺院におけるベカ (= 苦行者) としての地位は、呪われた者に対する救済であり、今日のバフチャラー女神寺院の境内では、ヤクシャ (神の財宝管理人) の師が残した言葉の通り、ヒジュラは女神のベカ (= 苦行者) としての地位を保持し、参詣者に対して女神の恩寵を授ける役割を担っている。とりわけ、男児の人生儀礼を目的とした参詣者にとって、ヒジュラから受け取る女神の恩寵は欠かせないものとなっている。

### 3.2. バフチャラー女神寺院を参詣する目的

バフチャラー女神寺院の参道では、カマーリヤ・カーストの男性数名が青い箱を腕に抱えて、人間の目や口、四肢を模った銀色の小さなプレートを参詣者に売る商売をしている。それら銀色のプレートは、バフチャラー女神へのお礼参りの際に購入するものである。バフチャラー女神寺院には、様々な病や悩み事を抱える人が治癒祈願の為に訪れ

ており、病が完治した暁には、女神に対するお礼参りを行い、完治した身体部位を模った銀のプレートを女神に捧げる。

たとえば、グジャラートの口語では、言葉を上手に話すことのできない人をボバダ (*bobada*) と称すが、ボバダの子供を抱える親たちは、バフチャラー女神からのシャクティ (聖なる力) をもらい、子供が健常に話せることを願う。ボバダの子供を連れて女神寺院を訪れる親族たちは、女神神殿の司祭から女神の恩寵を受け取り、さらに、神殿の脇に座り込んだヒジュラからも女神の恩寵を受け取ろうと、自分たちの子供を差し出す。子供を渡されたヒジュラは、子供の舌 (ボバディ: *bobadi*) を手で引っ張り、呪文を唱え、自らの息を口のなかに吹きかける。このヒジュラの動作からは、ボバダ (症状) になる原因がボバディ (舌) にあると想定していることがわかる。最後にヒジュラは、自分の手を子供の頭にかざして女神の恩寵を授け、そして、子供の親族はヒジュラに対して数十ルピーの金銭を手渡すのである。その後、子供が言葉を話すようになれば、それは女神の恩寵が得られたことの証であり、女神寺院にお礼参りに出かけなければならない。女神寺院の参道にて、人間の舌を模った銀色のプレートをカマーリヤから購入し、それを女神神殿内部にある賽銭箱に入れる。そして、ヒジュラに対しても金銭を手渡すのである。

バフチャラー女神寺院には、子宝祈願を目的とする参詣者も多数来訪しており、ヒジュラと直接対話することを望む人々も少なくない。2004年1月5日、女神神殿後部の脇で、筆者がヒジュラと共に座っていたときのこと、母と娘が我々の方に歩み寄ってきた。そして、筆者の隣に座っていたヒジュラと以下のような対話を交わした。

参詣者 (母): 恩寵をください。次に来る時には男の子を連れてくることのできるくらい。

ヒジュラ: ワラクディ (*varakhdi*) の葉っぱを食べなさい。

参詣者 (母): わかりました。食べさせます。

ヒジュラ: 日曜日には、1日1回だけ食事をとりなさい。

参詣者 (母): (娘に向かって) 良く聞いていなさいよ。

ヒジュラ: 塩抜きの食事をとりなさい。ご飯, ミルク, そして塩抜きのパン。塩はとらないこと。

参詣者 (母): 1回ですね。

ヒジュラ: そうです。日曜日に1回だけ食事をとること。

参詣者 (母): 男の子が生まれたら、サリーをもって来ます。(写真4参照)

ワラクディとは、神殿の背後に生える樹木の名称である。このワラクディの木の下に、かつては池があり、その池の水で沐浴した男装の女性が、男性に変身したという言い伝

えがある。その池は埋められてしまい、ワラクディの木の元には女神を祀る祠のみが残る。その祠も奇麗に改装されてしまい、かつての面影を知るよしもないが、ワラクディの木だけは今日まで伐採されずに、その姿を留めている。女神の恩寵を直接求めてくる参詣者に対して、ヒジュラはしばしば、このワラクディの葉を与えている。子宝を望む母と娘に対しても、ヒジュラはそれを手渡して、帰宅後に食べるようにと伝えている。その母と娘は、ヒジュラのまえから立ち去る時に、子宝を授かった暁にサリーを持参することを約束するが、それは女神に対してバーダー (*bādhā*: 誓願) を立てたのだとヒジュラは言う。パフチャラー女神の前で子宝 (とりわけ男児) 祈願をした者は、お礼参りの際に男児の像を奉納し、それから数年後には、その男児の剃髪儀礼のために再び女神寺院を訪れることになる。

### 3.3. パフチャラー女神に対する剃髪儀礼

ポバダ (病状) のように、病の克服を目的とする参詣者たちは、少人数で女神寺院を訪れるのに対して、男児の剃髪儀礼 (*ムンダナ*: *mundana*) を目的とする場合は多数の親類縁者と共に訪れる。デラックスバス一台を借り切って、50人以上の親類縁者を引き連れ、剃髪儀礼を遂行することは珍しくない。パフチャラー女神にとって最も重要な縁日にあたるヒンドゥー暦チャイトラ月 (西暦の4月頃) の満月の日が近くなると、女神寺院では500ほどの剃髪儀礼が毎日行われると、儀礼チケットを販売する係の人は語っていた。

男児の頭髮の一部を女神に捧げる剃髪儀礼とは、親族たちに囲まれて、男児が5歳くらいまでに通過する人生儀礼である。この儀礼を通過するまでは、男児は生まれながらの髪の毛を伸ばし続けなければならない。口語では「バプリー (*baburi*: 乱れた髪) を落とす」と表現される (写真5参照)。

剃髪に直接関わるワランド (*Valand*: 床屋業のカースト) の男性に、剃髪儀礼を行う理由を尋ねると、女神にバーダー (誓願) を立てた者が遂行する儀礼であると語る。

バーダー (誓願) をしていれば寺院で剃髪する必要があるが、それがなければ頭髮を剃り落して川に流してしまえばいい (2002年11月20日)。

この場合の誓願とは、女神のおかげで子宝を授かった際に、男児の髪の毛の一部を捧げるという誓いを立てることを指す。女神に対する誓願を立てていない場合は、剃髪儀礼は必要ないと語るが、しかし、男児が生まれた家では、誓願の有無にかかわらず、女神寺院において男児の剃髪儀礼を行うことが習慣となっている。また、女神寺院において参詣者の道案内をするブラーマン・カーストの男性は、剃髪儀礼には社会的な誕生としての意義があるとして、次のように語る。

男児が5歳になるまでは、その子供は女神のもの。剃髪によってパーダー（誓願）を完了させると、男児のパール（*bhār*：負の要素）は取り除かれ、男児はその両親に与えられる[2003年10月7日]。

つまり、「この世」に生まれた男児は、剃髪儀礼を通過することによって初めて、女神のもとを離れ、正式に親族の一員として迎え入れられるという。このブラーマン男性とワランド男性による剃髪儀礼の意義の解釈を重ね合わせると次のように言える。「この世」における生命の誕生は、女神のいる「あの世」から生命が来訪することを意味する。そして、剃髪儀礼前の男児というのは、しばらくの間は「あの世」と「この世」の境界領域に存在するが、女神に頭髪を捧げることによって、男児は女神のもとを離れて、「この世」の存在として迎え入れられるのである。このような、社会的誕生としての剃髪儀礼の意義は、女兒に対する剃髪儀礼がない理由とも関連する。女兒というのは、「他所の家に属す住人（パラカ・ガル・ニ・ワサティ）」であり、正式な親族の一員として迎え入れる儀礼を必要としない。そのため、女兒が生まれた場合には、まれに女神寺院を訪れて剃髪を行うこともあるが、大勢の親族を引き連れて、大がかりな剃髪儀礼を行うことはないのである。

パフチャラー女神寺院における男児の剃髪儀礼の細かなプロセスは以下の通りである。まず、親族に連れられた男児は、束ねていた長い髪をほどこき、親族男性の腕に抱えられて、神殿最奥の部屋まで進む。女神像の前までくると、11ルビーで購入した儀礼チケットをブラーマン司祭に手渡し、男児の頭髪の一部を司祭にナイフで切り落としてもらう。その頭髪の一塊はラット（*lat*）と称され、女神に捧げられる。ラット（頭髪の一塊）を捧げた男児は、ブラーマン司祭によって左腕に吉兆を意味する赤い印をつけてもらう。これで儀礼は一段落し、男児一行は残りの髪を剃り落すために神殿の外に出る。その時に、参詣者たちはヒジュラと遭遇することになる。

長い髪を垂らした男児とその親族が神殿から降りてくると、寺院境内には、両手のひらを叩きつける音が響き渡る。それはヒジュラが自分の存在を彼らに知らしめるサインである。ヒジュラは彼らのほうに近づいて行き、「ラット（頭髪の一塊）は捧げたか」と尋ね、あるいは、男児の左腕の印を見て、儀礼が一段落したことを確認する。そして、「バプリー（＝剃髪儀礼）のパイサ（*paisa*：貨幣）をよこしなさい」という決まり文句と共に、手のひらを相手の前に突き出す。この時点では、男児の剃髪を完全には済ませていないため、男児の親族たちは「戻ってきます」という台詞によって、ヒジュラからの請求を後回しにすることができる。

女神寺院の西門を出た右脇スペースには剃髪を行う場所が設けられており、そこにおいて、ワランド（床屋）の男性たちが、男児の髪をすべて剃り落す。剃り落とした髪が付着した衣服を脱がされ、全裸となった男児の身体は水で洗われる。それから男児は真新しい服に着替えさせられ、再び親族と共に女神寺院の境内に入る。そして、神殿

内のブラーマン司祭のもとで、赤い粉を水で溶かしたペーストで、吉兆を意味するスワステイカの印を頭頂部に描いてもらう。それによって女神寺院における儀礼は終了となる。男児一行は寺院を出て、近くの宿泊施設において共食をとった後に帰路につくが、ヒジュラと接触することなしにして女神寺院を出ることはない。真新しい衣服に着替えた男児を腕に抱え、女神神殿から降りてくる一行を見つけると、ヒジュラは両手のひらを打ち付けながら彼らに近づき、その先に進めないように道を塞いでしまうのである。

### 3.4. 見知らぬ他者との間に創発する「もう一つのストリート」

ヒジュラから呼び止められる前に、自らヒジュラのもとに歩み寄ってくる参詣者も存在する。そして彼らは、自分たちの子供をヒジュラに差し出し、恩寵を与えてほしいとヒジュラにお願いをする。とりわけ、大勢の親類縁者を引き連れて、剃髪儀礼の行程すべてをビデオカメラで録画する団体の場合は、男児をあやしてくれとヒジュラにお願いする。すると、ヒジュラのうちの1人が男児を腕に抱えあげて、以下のような歌詞の歌を仲間のヒジュラと共に歌い、そして踊って見せる。

小さい、小さい子供  
 バフチャラー女神の子供  
 ワサティ（住人）増えた、子供  
 長生きするように、子供  
 とてもめでたい子供……（2004年1月1日）

それから、手のひらを男児の頭に当てる行為を通じて、ヒジュラは女神の恩寵を受け、「一位合格するでしょう」、「大いに学んで、両親を飛行機に乗せて、ロンドン、アフリカに連れて行けるでしょう」<sup>17)</sup> というように、子供の将来が有望であることを親族たちに告げる（写真6参照）。

子供をあやすことの意義について、ひとりのヒジュラは筆者に対して次のように教えてくれた。

マータジー（女神を意味する語であるが、ここではヒジュラを指す）にあやしてもらうと、その男児のパール（*bhār*：負の性質）やドック（*dukkh*：苦しみ）が遠のいてしまい、その男児はマータジー（女神、ヒジュラ）の恩寵を得ることができる。男児の両親はマータジー（女神、ヒジュラ）に対して、501ルピー、あるいは101ルピーのパイサ（貨幣）とサリーを渡す（2004年1月1日）。

男児というのは、生まれながらにして負の性質を抱え込んでおり、ヒジュラにあやしてもらうことでその負の性質は取り除かれ、それと同時に、女神の恩寵を得ることができる。そして、ヒジュラによる恩寵の授与は、男児だけに限定されるものではない。男



児に付き添う親族たちも、みずからヒジュラの前に歩み寄り、己の頭を垂れて、女神の恩寵を授けてもらう。最後に、親族の代表者は、ヒジュラに対してパイサ（金銭）を手渡す。ヒジュラの側は受け取る金額を予め決めており、男児の剃髪儀礼の場合は51ルピーを要求し、子供をあやして歌を歌う場合には、101ルピー以上を要求する。1人のヒジュラが代表としてパイサを受け取ると、すべて1つの袋の中に入れて、かなりの金額が貯まった時点で、その場にいるヒジュラ全員の間で、均等に分配される。

このように、日頃は交わることのないヒジュラとヒジュラでない人々との間には、パフチャラー女神と所縁のある固有の土地において、女神の〈恩寵を授ける者〉と〈恩寵を授かる者〉としての関係が成立する。それは、「あの世」の存在であった男児が、「この世」における正式な一員として承認され、パフチャラー女神と繋がる「ストリート」を人びとが経験する時である。女神という絶対的な他者を媒介とすることで、日頃はヒジュラと人々との間に潜んでいる隔たりが埋められ、身体で直接触れ合うことが可能となる、具体的な「もう一つのストリート」が創発するのである。

女神寺院という固有の場所において、ヒジュラと参詣者は、互いの匿名性を確保したまま、〈恩寵を授ける者〉と〈恩寵を授かる者〉としての関係を築き、具体的な「もう一つのストリート」を創発させる。その時点において成立する関係とは、マルク・オジェが提唱した「関係の同一性 relative identification」(オジェ 2002: 131-135) の概念に沿って理解することができる。オジェによる「関係的同一性」とは、外部の他性を媒介として、既に存在する第1段階の差異を相対化し、その結果生じる第2段階の差異によって生み出される関係を指す。ヒジュラと参詣者との関係の場合、第1段階の差異とは、〈世俗の規範に従う者〉と、〈従わない者〉という、両者間に日常的な距離を生じさせる差異である。それが、女神という「あの世」の他性が介入することによって、両者の関係を断絶させていた差異が相対化され、〈女神の恩寵を求める者〉と、〈女神の恩寵を授ける者〉という、つながりを創発させる差異へと変換させられる。そして、その差異によって、両者が直接触れ合うことを可能とする、具体的な「もう一つのストリート」が生み出されるのである。

さらにオジェは、「関係的同一性」が我々の人間関係を構成させる上で重要であると主張し、その生成には、「他性の言語」と「同一性の言語」という2つの言語の組み合わせが必要であると論じる。「他性の言語」とは、「男でなく、女でなく」という具合に、カテゴリーを否定する言語であり、そこにはもう一つ別の新たな（未知な）可能性が含まれている。それに対して、「同一性の言語」とは、他者をアイデンティファイする政治的言語であり、「ヒンドゥー」「ムスリム」といった実体的カテゴリー生成に結びつき、排他的な関係を生じさせる効果を持つ。「同一性の言語」がもつ名づけの機能は、他者を一方的に表象する暴力性を含むが、しかし我々は、非決定的な状態にある他人との間に関係を築くことはできない。そのため、自己との関係において、他人を一時的に規定

する必要がある。この場合の規定とは絶対的なものではなく、相対的なものであり、よってオジェは、相対的なアイデンティフィケーション (relative identification : 「関係的同一性」) と称している。オジェによる「関係的同一性」は、ターナーのカーニバル論で示されるような平等 (コミュニタス) とは異なり、互いの差異を軸に据えることで成立する。ヒジュラと参詣者との「関係的同一性」においても、両者の差異が無化されることはなく、異なる人 (異人) としての地位がヒジュラに与えられることで成り立つ。しかも、その異人としてヒジュラの位置は、「ストリート」を経験する参詣者の側が、自己との関係において、女神により近い存在としてヒジュラのことを認めることで成り立っている。つまり、ヒジュラと参詣者とを繋ぐ、その場だけの「もう一つのストリート」の生成には、女神の存在を顕在化させる女神寺院の固有な場所性が、その成立条件となっているのである。

ただし、その条件が揃う環境であっても、参詣者とヒジュラとの間に「もう一つのストリート」が成立しないこともある。女神寺院を訪れる人々のなかには、ヒジュラのことを一瞥して、その前を素通りする人も少なくない。そして、男児の剃髪儀礼を目的とする参詣者が、ヒジュラの金銭を受け取る権利を無視して、その場から無理矢理立ち去ろうとする場合には、「この世のすべてのローガ (*roga* : 病苦) があんたの家に！」というように、ヒジュラは凶事を招く呪の言葉を吐くのである。時には暴言だけで済まないこともある。ヒジュラは自身が履いていたサンダルを片方を脱ぎ捨てて、それを逆さまにして地面に叩き付けることもある。逆さに置かれたサンダルは諍いごとが生じる兆しであり、その家が不運に見舞われるだろうという呪いを、ヒジュラは相手に知らしめるのである。

ヒジュラの暴言によって、男児の将来が不運に見舞われることを避けたい親族たちは、ヒジュラの怒りをなだめるために金銭を手渡そうとして近づいてくる。この時のヒジュラと参詣者との間には、「関係的同一性」にもとづく、「もう一つのストリート」が成立したとは言い難い。彼らは、目出度い人生儀礼を無事に終わらせたいと願い、ヒジュラが吐いた不吉な言葉の効力を最小限に止めようとしているにすぎないのである。ヒジュラの側は、一度立ち去った参詣者が引き返してきてくることを快く思わないため、手渡される金銭を拒絶してみせる。そのため、今度は、参詣者の側が、金銭を受け取るようにヒジュラに執拗に要求するのである。このような場面では、年配のヒジュラが仲介者として登場し、若年のヒジュラに対して「受け取りなさい」という言葉をかけて、両者の諍いを終わらせるのである。

## 4 おわりに

ゲーエクワード王国によって、バフチャラー女神に捧げられた寺院は、女神以外に、

その場を支配する「主」は存在せず、「縁」のない者たちがそこに集うことが可能な「『無縁』の場」(網野 1996)として存在してきた。その寺院の維持を任されていたカマーリヤは、カーストとしては規模の小さい集団ながらも、女神寺院の歴史の中枢にその座を占め、そしてヒジュラという「無縁」人を自分たちの傍においていた。しかし、植民地支配の頃から、「『無縁』の場」を直接の支配下に置こうとする世俗的権力の介入が始まり、また、カマーリヤ自身も世俗化していく中で、カマーリヤが保有していた権利は徐々に剥奪され、女神寺院の歴史の表舞台からカマーリヤの存在は抹消されてしまう。それとは対照的に、もともと「『有縁』の世界」(網野 1996)とはかけ離れた世界に生き、歴史の周縁に居続けたヒジュラの場合、今日においても、その後継者たちは女神寺院における居場所を確保する。バフチャラー女神寺院にヒジュラが存在することの正統性は、世俗的権力によって与えられているのではなく、女神が「主」として居座る固有な土地との結びつきにあり、また女神に近接した異人としての地位によって支えられている。

「あの世」に存在する女神の足下に触れて、将来の安堵を願う人々は、女神寺院において「ストリート」を経験すると同時に、ヒジュラとも遭遇する。日常生活の場であれば、ヒジュラという存在は、親族／カースト社会の規範から逸脱した、異質な他者として蔑視の対象となり、ヒジュラとの不意な遭遇は回避すべきものとして人々は考える。しかし、女神とヒジュラとの近接性が顕在化する女神寺院では、ヒジュラに与えられた周縁性が、聖なる次元における中心性へと変換され、女神により近い存在として、人々はヒジュラと自己とを関係づけるのである。言い換えれば、絶対的な他者である女神を前にしては、ヒジュラは周縁に追いやる他者ではなく、自己と関係づけることのできる他者となり、そこにおいて、人々とヒジュラとの日頃の断絶を埋め合わせる、具体的な「もう一つのストリート」が生成されるのである。

以上のように、「『無縁』の原理」(網野 1996)が今日においても息づくバフチャラー女神寺院では、「無縁」人のヒジュラが集い、「あの世」の女神に近づこうとする参詣者に女神の恩寵を授ける役割を担う。その時点で創発する、具体的な「もう一つのストリート」は、バフチャラー女神を「主」とする女神寺院の固有な場所性と、「この世」と「あの世」とを象徴的に繋ぐ、人々の「ストリート」の経験に支えられている。女神寺院という固有な場所において、人々が「もう一つのストリート」を経験することが可能である限り、ヒジュラはそこに集い、そこでの己の居場所を確保し続けるのである。

## 注

- 1) 本稿の土台をなす現地調査は、2000年11月より断続的に継続して実施しており、以下の研究助成金により可能となった。2001年度調査(12月31日～2002年1月8日)は平成13年度笹川研究助成、2003年度調査(4月4日～4月21日)は平成15年度澁澤民族学振興基金、

2003年度調査(9月15日～2004年2月7日)は平成15年度笹川研究助成, 2005年度調査(1月14日～3月2日)は平成16年度富士ゼロックス「小林フェローシップ」の一貫として実施した。また, 2006年度調査(8月31日～10月11日)と, 2007年度調査(2008年1月5日～2月20日)は, 筆者が研究協力者として加わる, 科学研究費基盤研究A(海外学術)トランスナショナルリズムと「ストリート」現象の人類学的研究(研究代表者: 関根康正)の一環として, そして2006年度調査(2007年3月15日～4月1日), 2007年度調査(2007年7月26日～8月26日)は, 筆者を研究代表者とする科学研究費若手研究スタートアップ「インド, グジャラート州におけるヒジュラの共同体とその『模倣』実践に関する調査研究」の一環として実施した。

- 2) Gujarat State Gaettee: Mahesana District, Ahmedabad; Government of Gujarat, 1975: 784.
- 3) ヒンドゥーの暦を指すウイクラム・サンワット(略してサンワット)とは, グプタ王朝のウイクラム王に関係していると言われ, 紀元前56年から始まる暦である。1年は12カ月からなり, 1ヶ月は満月の日を境に, 月の満ちる前半2週間と, 月が欠ける後半2週間に分けられる(Gujarat State Gazetteers 1989: 356)。
- 4) 本稿で頻出するカーストという語義について以下補則する。インド社会の特徴として語られるヴァルナ・ジャーティ(Varna-jati)制は, イギリス植民地時代の政策を通じて, 新たな再生産が行われた。ヴァルナとは元来, 供犠の理論と結びついた理論上の概念であったが, 司祭のブラフマナ(Brahmanas)を頂点とする4つの位階と, それらに含まれない人々はアウト・カーストという範疇におく5ヴァルナが, 植民地時代の知識人により, 日常の社会生活において機能する範疇としてのジャティ(jati: ヒンディー語)と関連づけられ, これら2つの民俗語彙(ヴァルナとジャティ)がカーストという一語で置き換えられた(Quigley 1993: 4-6)。実際の社会生活で機能するジャティとは, 非常に曖昧な範疇であり, 1つのリネージ集団を示し, あるいは全てのリネージを含む内婚集団を指すこともあり, さらには, 文化的伝統を共有する人々を総称するなど, その語が示す範囲は文脈により異なる(Quigley 1995: 5)。グジャラート語圏では, グナティ(gunati), あるいはナート(nāt: 口語)という語がヒンディー語のジャティと同様な使い方をされ, これらの語は親族組織を拡張させた大きな範疇として捉えることができる。
- 5) アソ月は1年のうちの最終月にあたり, その翌月のカラタク(Karatak)月からは新しい年が始まる。
- 6) 当時60歳代であったブラーマン・カーストの男性(2005年死去)は, バッファローに刃物を振り下ろす役割を担っていたのはタコール(コリ・カースト)の男性で, その人物は100歳を超える長寿であったと語っていた。
- 7) アナとは旧貨幣単位を示す。16アナが1ルピーに相当する。
- 8) 'Shri Bālā Tripurā Sūndari Bahucharāmbā', 1980: 141. パフチャラ女神寺院を管理運営するグジャラート州政府機関「パフチャラ女神寺院公益信託」が1980年に発行した書籍。女神寺院にまつわる歴史や逸話を紹介する。
- 9) "Shri Bahucharāji Mātānā Golakh Utpnn Vyavastha Niyam", Mahesānā, 1943.
- 10) 「パフチャラ女神寺院公益信託」発行の書(1980年)によれば, 独占権(イジャラ)は1954年6月30日に廃止されたと記される。
- 11) インディラ・ガンディー政権時代には, 「1969年グジャラート宗教省イナム廃止制定法 The Gujarat Devasthan Inams Abolition Act, 1969 (As modified up to 31st May, 1972)」が施行されており, その頃にグジャラート州全土の宗教施設の管理体制に変化が生じたものと考えられる。
- 12) グジャラート語の辞書定義によれば, ディヴェリユン(diveliyun)とは, 寺院の灯火(ディ

ウォ)と線香のために与える土地を指す。その土地で出来た穀物を、ディヴェリヤ(複数形)と称して寺院に納めていたと考える。グジャラート語辞書は次のものを参照。Bhavsar, Mafatlal, 2007, “*Navbharat Sarth Gujarat Shabd Kosh*”, Ahmedabad: Navbharat Sahitya Mandir.

- 13) イスラム統治下の土地保有におけるガラスの語義について、フォーブスは、『ラース・マラー』第4章において次のように記す。ムガル帝国第6代皇帝アウラングゼーブの時代が過ぎた後に、各地の大土地保有者たちが完全な独立を果たし、それと同時に、小規模の土地保有者たちも君主のために放棄した土地を取り戻そうと奮起していた。その時代に、「力をつけたラージプットとコーリーが暴動を起こし、町から牛を奪い、収穫期には住民たちを殺害した。なす術のない人々は、彼らの悪事から逃れるために、彼らに対して毎年金銭の支払いを行い、あるいは、耕作するのに必要な広さの土地を手放した。このように、悪事から免れるために、相手の請求に応じて支払うものをガラス、あるいはワール (*wol*) と呼んだ」(Forbes 1857: 273–274)。
- 14) 「ファトダの稼ぎをカマーリヤが消費する」という表現には、文字通りの意味と、もう1つ別の意味が込められている。地元で生まれ育ったブラーマンの男性によれば、日中稼ぎに出かけるヒジュラは、夜はカマーリヤと共に過ごすということ、つまり両者の間には性的な結びつきがあることを意味しているという。
- 15) 2007年3月、筆者は個別にT村を訪れた。その時、村人に対して、ヒジュラとT村との関係について尋ねてみたところ、T村はヒジュラがつくった村であり、後に土地を売り払い、村を出て行ってしまったのだと、彼らは語った。
- 16) 「汚す」という日本語訳は、グジャラート語のカランク (*kalank*: 英訳 *blemish, disgrace*) の訳語として用いている。
- 17) ロンドンやアフリカ大陸には、グジャラートから大勢の人々が移住しており、彼らに続いて海外移住を成し遂げることは、今日においても、人生におけるひとつの成功例として考えられている。

## 文 献

網野善彦

1996 『増補 無縁・公界・楽』平凡社。

オジェ, M.

2002 『同時代世界の人類学』森山工訳、藤原書店。

Forbes, A. K.

1857 *Ras Mala* (vol. 2). London: Richardson Brothers.

Gadhavī, S.

1935 *Chārana Devi Shrī Bahucharājī*. Ahmedabad.

イリイチ, I.

2001 「<sup>ホスピタリティ</sup>欲待と痛み」福井和美訳『環 [歴史・環境・文明]』7: 102–131。

川田順造

2001 「性——自己と他者を分け、結ぶもの」川田順造編『近親性交とそのタブー——文化人類学と自然人類学のあらたな地平』pp. 9–32, 藤原書店。

國弘暁子

2008 『『異装』が意味するもの——インド、グジャラート州におけるヒジュラの衣装と模倣に

関する考察」『非文字資料研究の可能性——若手研究者研究成果論文集』 pp. 153–164,  
 神奈川：神奈川大学 21 世紀 COE プログラム研究推進会議。

Mehta, S.

1947 Eunuchs, Pavaiyās & Hijadās. *Gujarāt Sāhitya Sabhā, Amadāvāda Kāryavahi, 1945–1946*. 2: 3–75.

Quigley, D.

1993 *The Interpretation of Caste*. Oxford: Oxford University Press.

Unjāvālā, K. S.

1933 *Shri Bahucharāji Utpatti*. Ahmedabad.



写真1 バフチャラー女神寺院



写真2 動物供犠の祭壇として使用された石柱



写真3 カルリ村の旧ゲートとガラーシヤの子孫たち



写真4 ワラクディの木





写真5 男児の剃髪



写真6 子供を抱えて、歌い、踊る様子